

水で蘇る都市の実践現場から

# 水都の歴史を活かすことで蘇った都市

松江市

ナビゲーター  
松江市産業振興部  
観光文化課



千鳥が羽根を広げたように見えることから「千鳥城」とも呼ばれる松江市のシンボル「松江城」。天守閣からは、眼下に宍道湖とそこに浮かぶ「嫁ヶ島」が借景となった美しい景色を眺めることができる

## 観光都市として 魅力を生みだした「水」

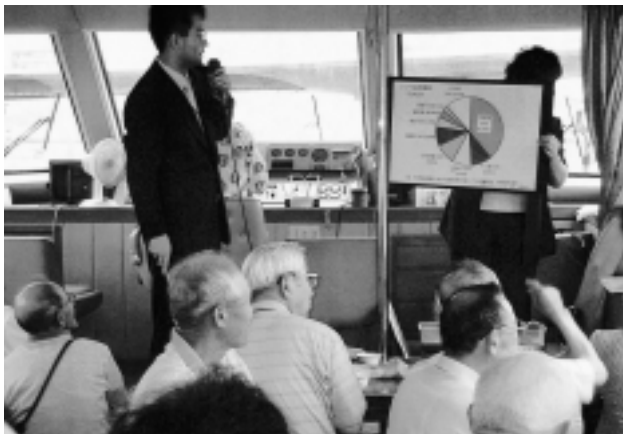
松江市は山陰地方最大の都市であり、「くびき神話」( )で知られる宍道湖に面した「レイクシティ」でもある。古代出雲の中心地として早くから開け、奈良時代には国庁や国分寺が置かれていたという歴史を誇る都市でもあることから、奈良市・京都市と並ぶ国際文化観光都市にもなっている。

だが、地理的な条件などから、一時は観光人口の減少に悩んでいた。その頃、神戸市で助役をしていた宮岡前市長が、神戸市におけるウォーターフロントの再生をきっかけとした観光事業の成功例をもとに、「水の都」と言われる松江市の歴史的遺産にスリットを当て、「水」を足がかりにした観光都市の復興を積極的に図った。

具体的には、松江城を中心に市内に張り巡らされた堀や川を利用し、平成九年から、それらを巡る全長約三・七キロ(所要時間約四五分)という「堀川めぐり」を開始。

「堀に面している家からは、観光客でうるさくなるのでは」といった反対意見も出ましたが、水都としての松江の魅力を知ってもらい、観光の目玉にしたいと言って、何とか説得して開始しました」と松江市産業振興部観光文化課の吉野修司副主任。

その狙いは見事に的中し、昔ながらの情緒が残る街並みを堀から眺めるのが人気



夏期の早朝には、「はくちょう」を利用して、宍道湖のじじみ漁を間近で見学するのはじめ、じじみの浄化作用の実験や宍道湖の生き物を観察したりする「エコクルーズ」も行われた



宍道湖遊覧船「はくちょう」。宍道湖は堤防が低いので、宍道湖沖に出ると周囲の風景が一望でき、「水辺」の魅力が堪能できる



宍道湖は、淡水と海水が入り交じる汽水湖として知られ、じじみの産地として有名。国内では7番目の大きさを誇る



江戸時代の城下町の雰囲気を残した「塩見縄手」には、松江市にゆかりの深い小泉八雲の旧邸などがある



「堀川めぐり」のために建造された屋形船。当初屋根はなかったが、雨の日でも観光できるようにと取り付けられた。欄干が低い橋では、屋根が下がるようになっていて、乗船客も頭を下げなくてはいけないが、それもまた楽しいと好評（屋形船は、冬期には炬燵船となり、これも人気がある）



「堀川めぐり」は全部で16本の橋をくぐるが、中には江戸調などに改修された橋もある

松江市産業振興部観光文化課

〒690-8540 松江市末次町86  
TEL:0852-55-5220 FEX:0852-55-5564  
URL:http://www.city.matsue.shimane.jp

を呼び、今では年間三四万人も訪れる観光名所となった。そうした成果もあり、住民も、松江の印象をよくしようと、水辺に面した庭や窓をそれぞれの工夫で美しくするなど、市民が一体となって、「水都」松江市の魅力づくりに協力するようになった。また、この他にも、「宍道湖遊覧船」（昭和六二年開始）、市内の有名観光ポイントを巡るループバスの「レイクライン」（平成七年開始）といった、「水」に関係した観光の魅力づくりも進められている。

さらに今後も、親水空間の整備や建物の建設など、「水」を足がかりにした都市計画が進められている松江市。まさに、「水」が再生させた観光都市の代表と言えよう。

（文責・CEL編集室）

（ ）に「く」にびぎ神話 出雲の国が未完成なことを憂いた、八束水臣津命が、四つ国から国を引き寄せて縫い合わせ、現在の島根半島ができたと言われる伝説。